

第8章 災害の爪跡



8-1 シャーロット台風の豪雨による地滑りで住家が倒壊、埋没 大兼久 1959 (S34) 年10月

21世紀に入り、加速度的な科学の進歩により、一昔前までは遠い未来のこととして描かれていた様々な文明の利器が登場し、私たちの社会は本当に便利になった。

しかし、社会がどんなに進歩しても、地震、津波、洪水、火山の噴火、土砂崩れなどなど、様々な自然災害は常時世界のどこかで発生しており、計り知れない自然のエネルギーの前で我々はあまりにも無力だ。

自然災害を未然に防ぐには、防災施設の整備、危険箇所の把握点検は勿論、何よりも日頃の備えと防災意識の涵養の重要性がよく言われる。

本章は、大宜味村でこれまでに発生した災害の実体を赤裸々に掲載し、その状況を胸に刻みつけることで、永く後世に語り継ぎ、二度と不幸な犠牲者を出さないために、地域の特性に応じた対策と防災意識を育むために活用してほしい。

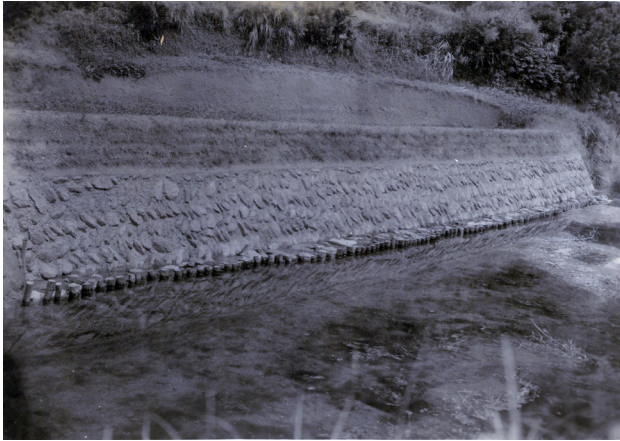
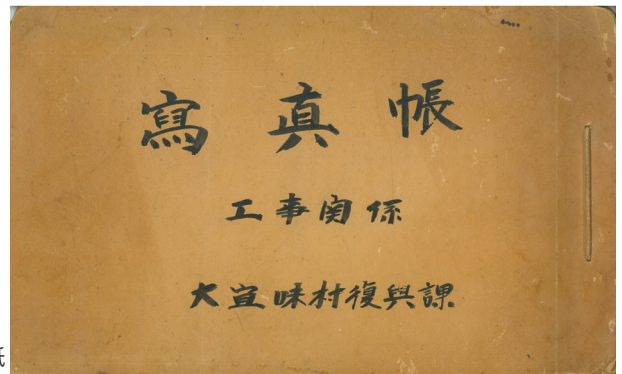
中には目をそむけたくなるような痛ましい写真もあるが、同じような思いを二度としてはならないという教訓として、クゥーマーガ（子孫）がこの大宜味村で末永く安全に幸せに暮らしていけるよう、心に留め語り継いでほしい。

水害と復興の記録 1950年代

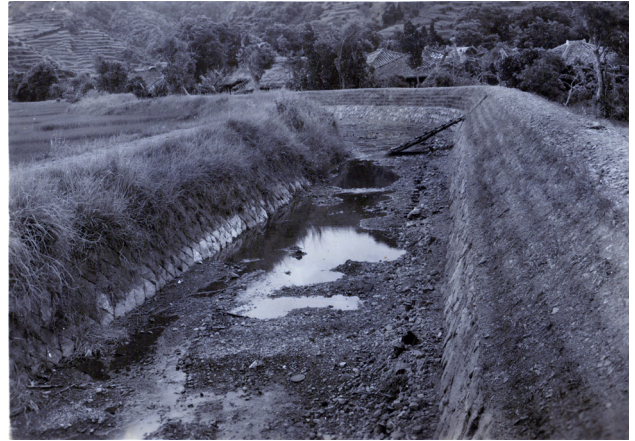
昭和 27 (1952) 年 6 月 9 日、沖縄本島の西側をかなり接近して低気圧が通過したが、前線は近海に停滞したため本島では全般的に豪雨となった。(沖縄県災害誌)』

この豪雨で村内河川の護岸などが被害を受けた。その時の復興工事関係の写真が大宜味村役場に保管されている。それ以外にも 1950 年代に行なわれた農道工事や排水路工事が記録されている。

8-2 大宜味村復興課 工事関係写真帳表紙



8-3 謝名城地内河川護岸 1952 (S27) 年 6 月 9 日水害
1952 年 8 月 11 日着工 1952 (S27) 年 9 月 10 日竣工



8-4 喜如嘉地内河川護岸 1952 (S27) 年 6 月 9 日水害
1952 年着手 1952 (S27) 年 9 月 16 日竣工



8-5 喜如嘉地内石保川河川護岸 1952 (S27) 年 6 月 9 日水害
1952 (S27) 年施行済



8-6 喜如嘉地内石保川河川護岸被害



8-7 喜如嘉地内石保川河川護岸 1952 (S27) 年 5 月 1 日水害



8-8 喜如嘉地内石保川河川護岸被害 1952 (S27) 年 5 月 1 日水害

シャーロット台風の被害状況 1959（昭和34）年

昭和34（1959）年10月16日～17日、沖縄本島とその周辺離島、並びに宮古島が暴風雨「台風18号シャーロット」に襲われ、本村でも5日間に亘って降り続いた雨で、ほとんどの集落で背後の山が崩れ、沖縄本島での死亡者46名中、38名の村民が犠牲になるという未曾有の大災害となった。死傷者は、田嘉里：死亡18名、負傷5名、埋没家屋7、大兼久：死亡7名、負傷4名、埋没家屋4、大保：死亡3名、負傷3名、津波：死亡10名、負傷4名であった。（大宜味村史 通史）

このシャーロット台風による大惨事は、一面では山岳と海に迫られる本村の地理的条件の厳しさを物語るものであり、今後起こりうる同様の災害を未然に防ぐために、次世代への記録と記憶の継承が重要である。



8-42 地滑りで7棟埋没した遭難現場 田嘉里



8-43 水田、田倒し埋没 田嘉里（世山原）



8-44 山の上から見た被災前の写真
1958（S33）年9月撮影



8-45 救助活動の様子 田嘉里



8-46 救助活動の様子 田嘉里

チリ地震津波 1960（昭和 35）年

この地震による津波は24日2時半ごろ到達し太平洋沿岸の各地に甚大な被害を生じた。沖縄では沖縄本島の中・北部の各地、石垣島、宮古島その他に襲来した。全沖縄の被害を要約すると死3、傷2、家屋全壊28、半壊109、床上浸水602、床下浸水813、橋梁破壊9か所、道路欠壊11か所、田畑の冠潮436町歩、船舶（5トン未満）8隻その他である。

チリ津波の沖縄各地における最大の高さ（cm） 那覇港50、大浦319、楚久289、杉田332、真喜屋232、石川289、漲水港（平良市）181、石垣港133（沖縄県災害誌 1977年 沖縄県）

村内では宮城橋の流出や津波小学校の備品が流されるなどの被害があった。



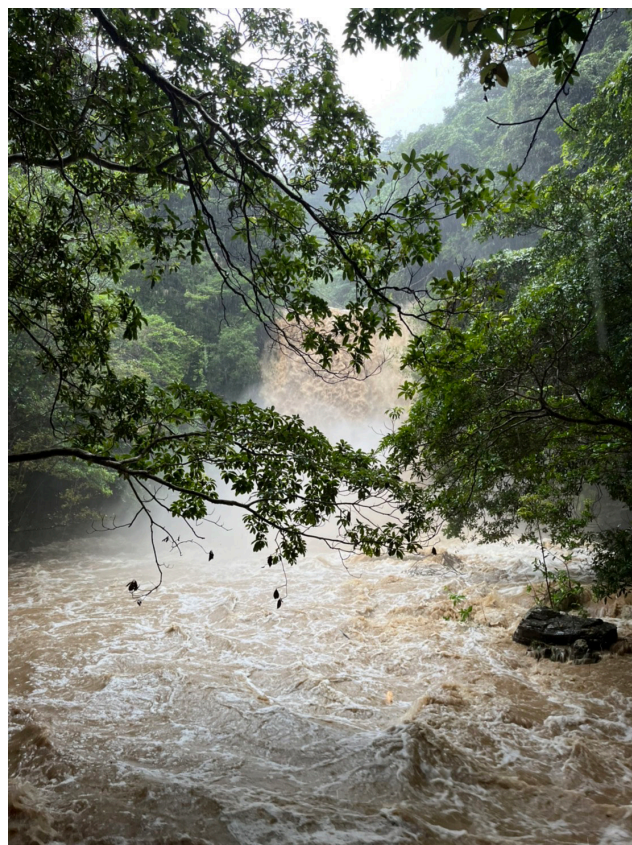
8-80 日本の裏側で起ったチリ地震の大津波で被害を受けた津波小中学校 1960（S35）年5月24日



8-81 チリ地震の大津波で崩れ落ちた宮城橋 1960（S35）年5月24日



8-95 増水前のター滝 津波



8-96 増水したター滝 津波



8-97 平南川ター滝で遭難の33名救助 津波 2017 (H29) 年

第9章 発展する大宜味村



9-1 役場旧庁舎と建設中の役場新庁舎 2022（R4）年8月12日

1908（明治41）年、沖縄県及び島嶼町村制の施行により大宜味村が誕生してから、2018（平成30）年には110周年を迎えることができた。1世紀余に亘る時代の流れの中で、村内では数多くの事業展開が行われ、村の風景や村民の生活スタイルも変化してきた。

1963（昭和38）年に塩屋大橋が完成し、幹線道路の道程が7kmも短縮され、交通事情が画期的に改善されたことで、陸の孤島と言われていた山原三村にも発展の道が大きく開けた。

1976（昭和51）年度から1988（昭和63）年度にかけて行われた農村総合整備モデル事業では、村内各地で「住みよい明るい農村」を目指した整備が行われ、生活環境は目覚ましく改善された。この事業は当時の根路銘安昌村長が、県庁に何度も足を運び、農林水産省に直接出向いて歎願し、その熱意が認められて沖縄県で4番目に勝ち取った事業であり、村史に特筆すべき功績である。

2003（平成15）年から始まった塩屋湾外海公有水面埋立事業では、大保ダム建設に伴う残土を利用した埋立により、32.7haの村有地が創出され、現在、「結の浜」の愛称で発展しつつある。

この章では、農村総合整備モデル事業、大保ダム建設、塩屋湾外海公有水面埋立、役場庁舎の変遷、公設質屋、塩屋大橋、小学校・中学校・保育所・幼稚園、辺土名高等の移り変わりを紹介していく。

これまでの村の歩みの上に立ち、これからも村民と共に大宜味村は発展を続けていく。

塩屋湾外海公有水面埋立事業（結の浜の創出）

本村の用地不足の解消を図り、各種の公共施設用地・住宅用地・企業用地等を創出するため、大保ダム建設において生じる残土を活用し、塩屋湾外海公有水面への埋立が実施された。



9-16 埋立工事が行われる前 2003（H15）年頃か



9-17 埋立初期 仮設護岸築堤工事 2003（H15）年10月



9-18 残土運搬のための仮設橋を設置中 2004年（H16）1月



9-20 埋立工事完成後の同場所 2008（H20）年12月



9-19 仮設橋設置後 2004（H16）年5月



9-32 埋立工事中のＪＡおきなわ集荷場前
2006（H18）年8月



9-33 埋立工事完了後のＪＡおきなわ集荷場前
2010（H22）年7月



9-34 埋立工事完成 2007（H19）年3月



9-35 塩屋湾外海埋立竣工式典及び祝賀会
愛称「結の浜」に決定 2007（H19）年10月

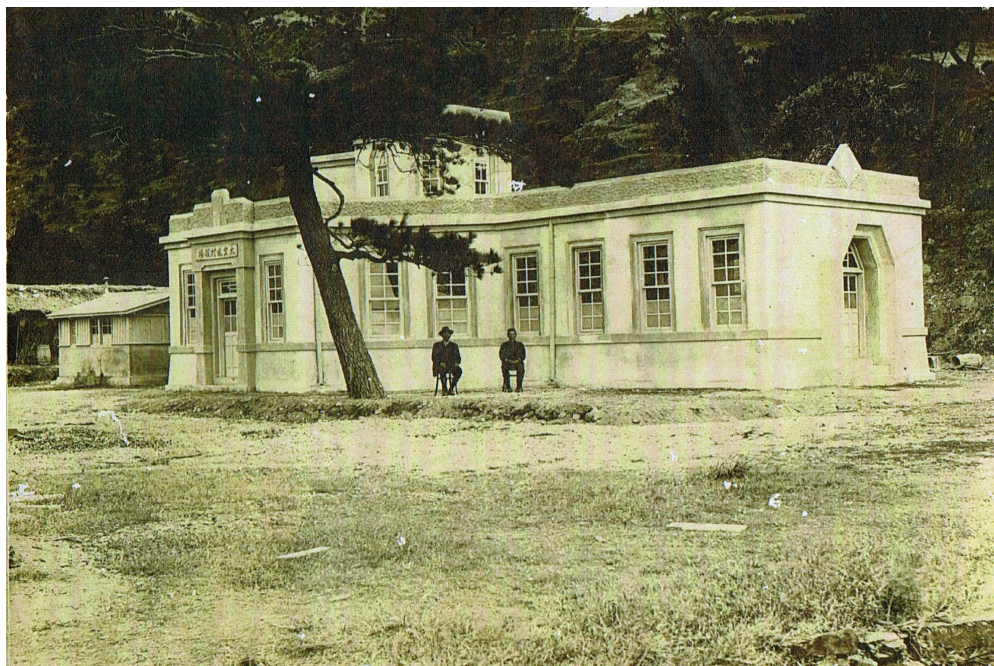


9-36 式典オープニング 大宜味中学校2・3年女子生徒による「よさこいソーラン節」 2007（H19）年10月

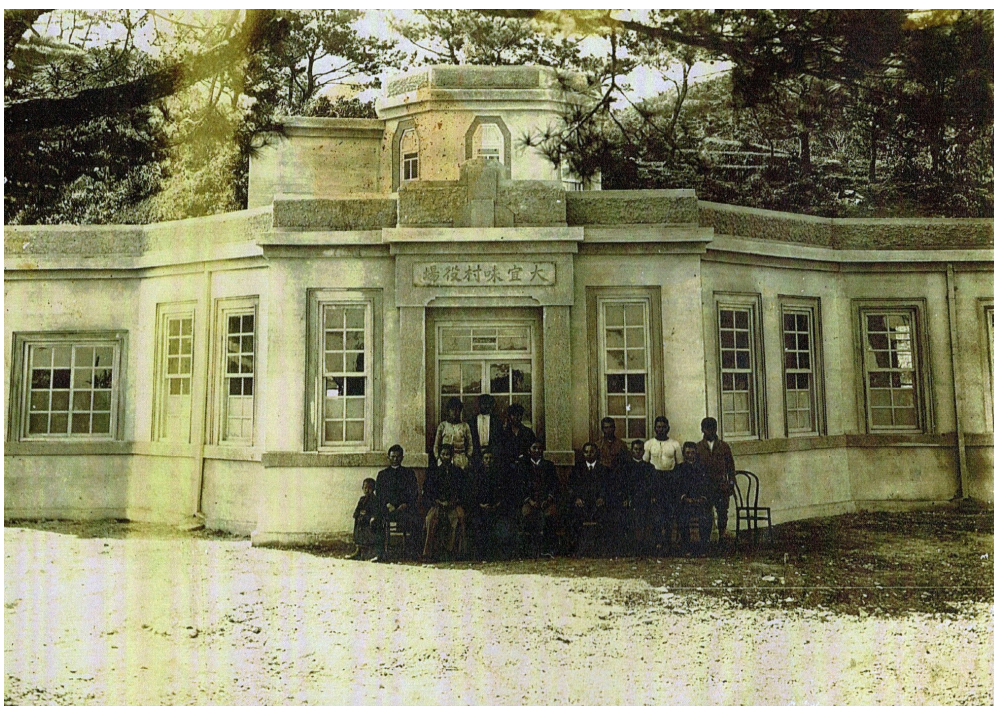
役場庁舎の変遷

大宜味村役場旧庁舎は、県内で現存する最も古い本格的な鉄筋コンクリート造の建築物で、1925（大正14）年に竣工。新庁舎落成までの47年間、庁舎として使用され、1997（H9）年に県の重要文化財、2017（平成29）年には国の重要文化財（建造物）に指定された。

1972（昭和47）年、旧庁舎背後に総面積1,002,692㎡2階建ての新庁舎が竣工した。当初は村民ホールとして使用されていた2階ホールで、最初に結婚式を挙げた夫婦は今年（2022年）、めでたく銀婚式を迎えることになるが、本庁舎は老朽化により2021（令和3）年に49年の役目を終えて取り壊され、現在、新庁舎の建設が進んでおり、地上三階建の3代目庁舎は、2023（令和5）年5月開庁予定である。



9-53 竣工直後の様子 右：金城平三（請負者） 左：天野鍛助（当時の大宜味村長）
二人して大宜味村の未来を語っているのだろうか 1925（T14）年3月



9-54 役場吏員 1925（T14）年3月 国頭郡志によると、大正5年の村吏員は12名（村長、収入役、書記6、林野監守1、農業技手1、雇2名）とあるので、この人数でも十分な広さであったろう



9-71 1987 (S62) 年 「海邦国体漕艇競技大会まで 38 日」の残暦板がかかっている



9-72 1972 (S47) 年の落成から 49 年後、取り壊し間近の庁舎 2021 (R3) 年



9-73 正面玄関 2021 (R3) 年



9-74 左：地域包括支援センター 右：農業委員会 2021 年



9-75 2021 (R3) 年 8 月解体作業終了



9-76 新庁舎建設の間は旧大宜味小、旧幼稚園を仮庁舎として役場業務を行った



9-77 2022 (R4) 年 5 月 19 日時点の新庁舎進捗状況



9-78 新役場新庁舎イメージ図

あとがき

「村民のための村史」を柱に、村史編纂委員会写真集専門部会で作業を進める中、多くの皆さまの大切な写真や情報のご提供など、多大なご協力のお陰で、この『写真集』をまとめることができました。心から感謝したいと思います。

昭和 53（1978）年度に刊行された『大宜味村史』（旧村史）から 40 年余が経過する中、これまでに積み残された課題を補いながら、「21 世紀前半の時代を構想し、より良い時代と地域を大宜味村民みんなでつくっていかうとするとき、私たちの依拠すべき第一の土台はこの大宜味村の歴史である」ことをあらためて認識し、「新大宜味村史」の編纂に取り組んで参りました。

「写真はもの言わぬ史実」と言われるように、村史編纂係のメンバーを中心に収集されたこれらの写真は、まさに「時代をつなぐ語り部」のようにその姿を現し、私たちを過去から現在までの時空間の旅へといざない、さまざまな大宜味村の表情を伝える役割を果たすものであり、残された一枚の写真足を足掛かりに、その「言葉」を聞き取り、どんどん「もの言う」のは私たちの役割です。

「よくぞ残してくれた」一コマや、「あの時の場面が残っていたら」、と思わせる「あの頃」を知る人々の頭の中にある情景、それらもすべて大宜味村の歴史の史実です。

いくつもの時代を語るために、約 1,250 枚の写真は第 1 章から第 9 章に厳選、整理され、各字のバランスや内容を考慮しました。割愛せざるを得なかった写真、どうしてもたどれなかった写真も多々ありますが、掲載された一つひとつの写真の中から、大宜味村の長い歴史と人々の暮らしの表情、喜怒哀楽を感じとっていただけたら幸いです。

たくさんの写真から、懐かしいあの人が見つけられますでしょうか？知らなかった大宜味村の歴史や暮らしが伝わるでしょうか？

この『写真集』から、多くの語らいが生まれ、新たな情報が加えられていく材料となりますように。

また、未来へつながる子どもたちへの、情報の発信箱として活用されますことを切に願いたいと思います。

2022 年（令和 4 年）12 月

大宜味村史編纂委員会 写真集専門部会長 平良 次子

大宜味村史編纂委員会

[編纂委員長]	仲原 弘哲	元今帰仁村歴史文化センター館長
[副委員長]	前田 國男	大宜味村文化財保護審議会 会長
[委員]	新城 和治	元琉球大学教授
[委員]	当山 昌直	沖縄大学地域研究所特別研究員
[委員]	安座間 安史	琉球大学非常勤講師
[委員]	平良 次子	南風原文化センター館長

写真集専門部会

[部会長]	平良 次子	南風原文化センター館長
[副部会長]	宮城 樹正	やんばる学研究会 会員
[委員]	仲原 弘哲	元今帰仁村歴史文化センター館長
[委員]	米須 邦雄	大宜味村教育委員会 教育長

事務局（大宜味村教育委員会）

[教育課長]	真喜志 亮
[村史編纂係長]	宮城 光一
[会計年度任用職員]	新城 喜代美、河津 多恵子

大宜味村史『写真集』

発行日 2022（令和4）年12月
編集 大宜味村史編纂委員会 写真集専門部会
〒905-1306 沖縄県国頭郡大宜味村字大宜味1番地
TEL：0980-44-3009
発行 大宜味村教育委員会
印刷 うえや企画印刷
〒905-0004 沖縄県名護市中山1029-25
TEL：0980-52-7723